*この作家略歴は、番号、作家名、生没年、作家名（ふりがな）、略歴の順に記載しています。

*掲載順は、本展展示順に則っています。ただし、複数の作品を展示した作家の略歴については、初回のみ記載しています。

1	江上茂雄	1912-2014	えがみ しげお
福岡県山門郡瀬高町（現みやま市）に生まれる。間もなく福岡県大牟田市に転居し、第五太牟田尋常小学校卒業後の15歳で三井三池鉱業所建築課に入社、以後45年間会社勤めをしながら主にクレパス・クレヨンで地元の風景を描きつづける。60歳の退職と同時に熊本県荒尾市に転居し、水彩絵具による風景写生画を67歳から始める。風景画を1日1枚描く毎日をほぼ30年間続ける。他にも鉛筆による植物細密画や実験的・抽象的な即興絵画、木版画、染め紙など、多岐にわたる制作を実践した。			
2	児島善三郎	1893-1962	こじま ぜんざぶろう
福岡県福岡市に生まれる。県立中学修猷館卒業後上京し一時、本郷洋画研究所で研鑽を積む。大正10年二科展に初入選し、翌年二科賞を受賞。同14年渡仏し、昭和3年に帰国。翌年二科会会員となるが、同5年同会を脱退。同志らと独立美術協会を設立し、以後同会の代表作家として活躍する。西洋の模倣ではない日本人の油絵を目指し、南画や琳派の作風を取り込んだ装飾性の高い独自の絵画を確立した。			
3	中村琢二	1897-1988	なかむら たくじ
中村研一の実弟として新潟県佐渡島に生まれる。のち福岡県宗像郡に移住。県立中学修猷館を経て、大正13年東京帝国大学を卒業。昭和3年帰国した兄の勧めで本格的に絵筆を握ることを決意。昭和5年安井曾太郎に師事し、同年から二科展に連続入選する。同17年一水会会員となり、戦後は日展にも出品を重ね、同会顧問となる。明快な色調と軽妙なタッチの親しみやすい風景画、人物画を得意とした。			
4	坂本繁二郎	1882-1969	さかもと はんじろう
福岡県久留米市に生まれる。森三美に洋画の基礎を学び、明治35年上京。不同舎、続いて太平洋画会研究所で学ぶ。同43、44年と文展で連続受賞。大正2年二科会の創立に参加し、同会には昭和19年まで所属する。大正10年渡仏。同13年帰国後は久留米市に居住し、昭和6年八女郡に転居。戦後は無所属のまま終生この地で幽玄質実な絵画を追及。芸術院会員を辞退するなど、超俗的な制作姿勢で一生を貫いた。1956年文化勲章。			
5	高島野十郎	1890-1975	たかしま やじゅうろう
福岡県久留米市に生まれる。県立中学明善校、名古屋の旧制八高を経て東京帝国大学農学部水産学科に入学。大正5年(1916)同校首席卒業後、独学で絵画制作に打ち込む。昭和5年(1930)からアメリカ経由で渡欧し各地を写生旅行する。同8年帰国後は生家に戻るも間もなく上京し、晩年は千葉県柏市に幽居する。帰国後は個展のみで作品を発表し、風景や静物を対象に細密な写実を追求した。火の点った蠟燭の作品がよく知られている。			
6	大内田茂士	1913-94	おおうちだ しげし
福岡県朝倉郡大福村(現・朝倉市)に生まれる。県立朝倉中学を卒業後、浜哲雄、山喜多二郎太、高島野十郎らに指導を受ける。昭和12年(1937)上京、新宿絵画研究所で鈴木千久馬に師事。翌々年光風会展に初入選し、その後国展にも連続入選。戦後は日展に出品し、同26年に特選を、また国展でも同22年国画賞を受賞する。同23年からは国展を退き、示現会の創立会員となり同展に連続出品。同38年日展審査員となり、翌年会員、同53年評議員、平成元年理事に就任。示現会では昭和52年常務理事になる。同63年日本芸術院賞恩賜賞を受賞し、平成2年(1990)には日本芸術院会員に推された。			

7	中村研一	1895-1967	なかむら けんいち
	<p>福岡県宗像郡宮田村(現宗像市)に生まれる。大正3年県立中学修猷館を卒業。翌年上京し、本郷洋画研究所を経て東京美術学校で岡田三郎助に師事する。同校卒業の同9年に帝展に初入選し、翌年特選を受賞。同12年渡仏、サロン・ドートンヌ会員となる。昭和3年の帰国後は帝展で特選を連続受賞するなど、官展、日展の重鎮として活躍。同25年日本芸術院会員。戦後は手堅い写実に鮮やかな色感を加味した力強い画風を押し進めた。</p>		
8	牛島憲之	1900-97	うしじまのりゆき
	<p>熊本県熊本市に生れる。昭和2年東京美術学校西洋画科卒業の年に帝展に初入選を果たす。戦前は東光会や主線美術協会、創元会などでも活躍する。戦後の同24年に日展を離れ、立軌会の設立に参加し、同会をおもな発表場所とした。確かな造形力に裏打ちされた大胆な構図や形態、そして柔和な色彩でもって日本の風景を黙々と描き続けた。東京芸大の教授も務め、同58年には文化勲章を受章した。</p>		
9	山喜多二郎太	1897-1965	やまきた じろうた
	<p>福岡県鞍手郡山口村(現・宮若市)に生まれる。福岡工業学校を卒業後、大正4年(1915)東京美術学校に入学、藤島武二に師事する。また在学中に日本画家寺崎広業にも師事。同9年から帝展に入選を重ね、昭和9年(1934)特選を受賞。また大正14年から光風会展にも入選を重ね、昭和9年会員となる。戦後は日展、光風会それぞれの委員を歴任。油彩画に南画的画趣を加味し、後年は次第に抽象化の傾向を強めていった。水墨画も得意とした。</p>		
10	蓮尾辰雄	1904-88	はすお たつお
	<p>福岡県大牟田市に生まれる。三池中学を経て、東京美術学校日本画科を卒業。はじめ松岡映丘に師事し帝展に出品するが、映丘没後は前田青邨に師事し、昭和23(1948)年に院展に初入選、以後、女性や子供を主に透明感ある洗練された人物像で入選を重ね、2度の受賞を経て、院友や特待に推挙される。また青邨のもと、法隆寺金堂壁画や高松塚古墳壁画の模写事業にも参加した。</p>		
11	石橋美三郎	1893-1968	いしばし みさぶろう
	<p>福岡県山門郡瀬高町に生まれる。県立中学伝習館を中退して上京、太平洋美術研究所に学ぶ。大正後期から太平洋画会展で活躍し、のちに会員等を経て同会幹部となる。その一方で、二科展、一水会展、示現会展等にも出品した。昭和初期には、福岡県内や九州各地で個展を毎年のように開催し、また福岡県美術協会の創設に加わり、東京筑後美術展にも参加した。</p>		
12	古賀春江	1895-1933	こが はるえ
	<p>福岡県久留米市に生まれる。本名亀雄(よしお)。明治45年(1912)県立中学明善校を中退、上京し太平洋画会に入る。大正2年(1913)日本水彩画会研究所に入門。同7年頃から油彩画に着手する。同11年二科賞受賞。また同年、前衛グループ「アクション」を結成。前衛画家の中でもキューブ風、クレール風、シュール風といった多彩な表現の試みで異彩を放ち、詩作にも非凡であった。晩年は神経衰弱に悩まされ、病氣療養のかたわら制作に従事していたが、38歳で没した。</p>		
13	水原房次郎	1913-85	みずはら ふさじろう
	<p>山門郡瀬高町に生まれ、のち大牟田市に転居。上京し、昭和12年(1937)田中佐一郎に師事、独立展に初入選し、以後、同51年まで出品を続ける。戦時中は疎開するまで池袋を拠点としたが、戦後は京都に定住し、また数回ヨーロッパなどへ取材旅行を行う。同53年、新芸術協会の結成に参加、理事をつとめる。同54年からはフランスのル・サロンへ出品、のち会員。生涯で62回の個展を関東、関西、福岡の各地で開催。教会のステンドグラスに触発された、色彩鮮やかな作風を展開した。</p>		

14	安永良徳	1902-70	やすなが よしのり
	神奈川県横浜市に生まれる。本籍地は福岡市。県立中学修猷館を卒業後、大正8年東京美術学校彫刻科に入学、朝倉文夫に学ぶ。昭和2年同校卒業後サトウハチローらと共同生活を送る。同6年構造社展に初入選、翌年「首B」で構造社賞を受賞。以後構造社の代表作家として活躍し、要約されたユニークなフォームで常に話題を集める。シベリア抑留後、昭和22年に復員してからは福岡市に居住。文展でも活躍し、戦後は日展委員を務める。		
15	野見山暁治	1920-	のみやま ぎょうじ
	福岡県嘉穂郡穂波村（現飯塚市）に生まれる。昭和13年上京し、同舟舎洋画研究所に通う。同年東京美術学校に入学。昭和23年自由美術家協会展で受賞。同27年渡仏。同33年第2回安井賞を受賞する。東洋画への新たな興味を感じて同39年帰国し、同43年から56年まで東京芸術大学で教鞭をとる。図と地の絶えざる反転を強いる両義的なイメージづくりは現代絵画の新たな魅力を伝える。文筆にも優れた才能を発揮し、著書も多数発表。同53年には『四百字のデッサン』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞する。平成4年芸術選奨文部大臣賞受賞、同6年福岡県文化賞、同8年毎日芸術賞、同12年文化功労者に選ばれ、同26年文化勲章受章。		
16	島田美津	1926-	しまだ みつ
	大分県安心院町に生まれる。昭和30年代に福岡市へ移住。はじめ福岡で松尾晃華、吉本尚二に日本画を学び、のちに京都の岩澤重夫に師事する。同44年の福岡県展、福岡市展でそれぞれ最高賞を受賞し、翌年から県美術協会会員となる。同49年に日展に初入選、その後も入選を重ね、のち会友。同50年から10年間、堂本印象塾である東丘社の会員となる。他に、京都日本画家協会の会員になり、日春展にも出品を続けた。京都系の花鳥画の伝統を受け継ぐ。		
17	片山攝三	1914-2005	かたやま せつぞう
	医師として帝政ロシア時代にシベリアに渡った父の勤務地であるブラゴヴェシエンスクに生まれる。昭和7年県立中学明善校を卒業、疋田晴久に師事し、同10年より営業写真の道に入り、日本写真美術展、国際写真サロン等で入選を重ねる。戦後、観世音寺を皮切りに、臼杵の石仏や富貴寺等を取材、仏像写真の個展や出版を数多く行う。さらに同35年頃からライフワークとなる芸術家の肖像写真の撮影を開始、モノクロームによりその自然な風姿を捉え続けた。他にも富永朝堂、安永良徳らの彫刻写真を手掛けた。平成元年当館で回顧展を開催、種々の功労賞等を受賞、九州産業大学教授もつとめた。		
18	藤田吉香	1929-99	ふじた よしか
	福岡県久留米市に生まれる。県立中学明善校を経て、昭和30年東京芸術大学を卒業。同34年国展で国画賞を受賞する。同37年から41年までスペインに留学し、この間ボッシュなどの古典絵画を模写。同42年国画会会員に推挙される。同45年第13回安井賞を受賞、同56年第1回宮本三郎賞を受賞。金、銀などの単色の背景に花や人物などのモチーフを浮き立たせた画面は、初期ルネッサンス絵画にも通じる静謐な情感をたたえている。		
19	伊勢幸平	1904-88	いせ こうへい
	福岡県福岡市に生まれる。旧制福岡中学卒業後、東京美術学校西洋画本科に入学。昭和3年に卒業し、研究科に進む。同10年特別史跡の王塚古墳壁画を模写。同32年に創元展に初出品し、以後同展に出品を重ね、同41年に福岡北支部長に、同56年には常任委員に就任した。風景を明快な色調と堅牢な構成で描いた。		

20	宮崎準之助	1930-89	みやざき じゅんのすけ
	福岡県早良郡脇山村（現福岡市）に生まれる。県立中学修猷館を経て、京都学芸大学(現京都教育大学)特修美術科で彫塑を学ぶ。昭和31年から北九州市に居住し、県立小倉聾学校等で美術教員を務め、同時に福岡の前衛美術集団「九州派」に参加。九州派解散以降も、芸術を生活者の視点でとらえるという思想を誠実に展開させ、同41年の初個展以降は、くすのきを主素材とした木彫作品を制作する。同57年福岡県文化会館で大規模な個展を開く。没後、平成10年福岡県立美術館で初回顧展が開催された。		
21	豊福知徳	1925-2019	とよふく ともりのり
	福岡県久留米市に生まれる。国学院大学国文学科を中退後、昭和21年(1946)彫刻家富永朝堂に師事して木彫を学ぶ。同25年から新制作協会展に出品。同34年第2回高村光太郎賞を受賞。翌年からミラノに移住し、カーネギー国際美術展、ベネチア・ビエンナーレなどに活躍する。1993年紫綬褒章、2001年勲四等旭日小綬章を受章し、1990年毎日芸術賞、2005年福岡県文化賞を受賞。板に穴を穿つ独自のスタイルで、現代彫刻の代表作家として国際的にも評価が高い。		
22	藤岡 一	1899-1974	ふじおか はじめ
	福岡県大牟田市に生まれる。県立中学明善校卒業後、一高受験のため上京するが、川端画学校にも通い、画家を志す。大正11年(1922)東京美術学校西洋画科に入学、藤島武二に師事する。同期に小磯良平、山口長男がいた。同校卒業後の昭和4年(1929)から同8年にかけてフランスに滞在。同年の第3回独立美術協会展にフォービズム的傾向の作品を出品し、O氏賞を受賞。同11年に同会会友、16年には会員となる。戦後の一時期日本大学講師として後進を指導。同33年福岡市に帰郷するも独立展への出品を続け、同42年第35回独立展では児島賞受賞する。渡欧の誘いを再三拒否、「日本人の油絵」をめざして制作に励んだ。40年頃からは、にじみの効果を生み出すリンシードオイルを多用し、波や山などを文様的な形態で象徴するという独自の画風を築いた。		
23	大淵 純	1960-	おおぶち じゅん
	福岡県大川市に生まれる。伝習館高校卒業後、昭和61年創形美術学校造形科研究課程を終了。その後も東京で、個展、グループ展等多くの展覧会に発表。平成7年「VOCA1995 現代美術の展望－新しい平面作家たち」展に推薦出品されるなど、これからの絵画を模索し続けている作家である。		
24	松本英一郎	1932-2001	まつもと えいいちろう
	福岡県久留米市に生まれる。県立明善高校を卒業後、松田諦晶に学ぶ。昭和28年東京芸術大学に入学、さらに専攻科へ進み林武に師事する。在学中から独立展に出品し、独立賞を連続受賞して、同35年には会員に推挙された。同43年には多摩美術大学に赴任、のち教授となる。「肥満体」、「退屈な風景」、「さくら・うし」「花と雲と牛」等の各シリーズで、現実と非現実とが複合された独自の世界を描き続けた。		
25	今岡昌子	1965-	いまおか まさこ
	神奈川県横浜市に生まれる。2001年コニカプラザ（東京）他にて写真展「re・birth～ガレキの隣のオンナたち」開催。同年東京都写真美術館にて「明日のために－日本のドキュメンタリー写真家」参加。2002年第2回さがみはら写真新人奨励賞、2007年第23回東川賞新人賞受賞。2008年九州へ移住。個展「トポフィリアー九州力の原像へ」を2011年つなぎ美術館（熊本）、2013年ギャラリーおいし（福岡）などで開催。2014年ギャラリーおいしにて個展「そしてトポフィリア」を開催。2014年には当館で開催した「福岡県文化会館建設50年記念 とととと？ きおく×キロク＝ 」に出品した。現在は大阪在住。		

26	小川幸一	1950-	おがわ こういち
	<p>福岡県福岡市に生まれる。昭和49年多摩美術大学卒業後、版画家になることを決意し帰郷。同51年から本格的に作家活動に入る。同57年「現代日本絵画展」で佳作賞、同59年には「ジャパンエンバ美術コンクール」展で京都国立近代美術館賞を受賞し、版画家として広く知られるようになる。以後国内外の版画コンクールに出品・受賞を重ね、平成3年には「リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」展で美術館買上賞を受賞。同19年福岡市文化賞を受賞。独特の浮遊感あふれる有機的な形態は、ときに清冽でときに妖艶である。</p>		
27	木戸龍一	1937-	きど りゅういち
	<p>福岡県福岡市に生まれる。修猷館高校を経て、福岡学芸大学美術科を昭和35年卒業。同51、52年と第12、13回現代日本美術展に、同54年第1回ヘンリー・ムーア大賞展に出品、また同56年第1回びわこ現代彫刻展で優秀賞を受賞。数多くの個展やグループ展でも、抽象彫刻の発表を続ける。他に、「炭鉱犠牲者復権の像」や「中野正剛氏」等の具象彫刻によるモニュメントも数多く手がける。また九州造形短大学長や福岡県美術協会理事長を歴任し、福岡の美術文化の発展に大きく寄与した。平成17年度福岡市文化賞受賞。</p>		
28	木村利三郎	1924-2014	きむら りさぶろう
	<p>神奈川県横須賀市に生まれる。1947年神奈川師範学校（現横浜国立大学）を卒業後、教職に就く。その後法政大学哲学科に入学、哲学者谷川徹三に学び美術評論家を志す。1954年同大学卒業。美術評論家久保貞次郎が主導した創造美育運動に賛同し、竹田鎮三郎、鬚嘔、池田満寿夫ら戦後日本を代表する芸術家との交流を深めた。1964年単身渡米。その後約半世紀に渡り数々の芸術家が居住するニューヨークのウエストベス・アーティスト・ハウジングを拠点に活動を続けた。都市の崩壊と再生といった文明批判をテーマに版画作品を制作、主なシリーズとして、都市を様々な側面からとらえ、抽象的、記号的にイメージを生成した「City」がある。2014年ニューヨークにて逝去。</p>		
29	鹿児島寿蔵	1898-1982	かごしま じゅぞう
	<p>福岡県福岡市に生まれ、福岡高等小学校を卒業後、人形制作の道に入る。大正9年（1920）に上京し、テラコッタを素材として制作を続けるが、昭和7年（1932）に楮やパルプ等を素材とする堅牢な躯体に自ら染めた和紙等を貼り重ねる「紙塑人形」の技法を完成させ、人形美術団体甲戌会を結成する。同11年第1回帝展に入選、以後も新文展等に入選し、29年社団法人日本工芸会設立に際し正会員となり、以後日本伝統工芸展で審査委員等をつとめた。同36年に紙塑人形のわざで重要無形文化財保持者に認定される。アララギ派の歌人としても著名で、二つの創造活動が深く連携しあい独自の幻想的な作風を築いた。</p>		
30	李田たけを	1910-87	もくた たけを
	<p>兵庫県に生まれる。はじめ日本画を、のち油彩画を学び、昭和10年(1935)独立美術協会展にて初入選し、須田国太郎に師事、独立賞受賞を経て、同24年会員となる。戦前は写実的風景画、戦後は廃材、布、金属などを画面にはりつける半立体の作品を制作。</p>		
31	熊谷守一	1880-1977	くまがい もりかず
	<p>岐阜県恵那郡に生まれる。明治33年東京美術学校西洋画科に入学する。同期に青木繁や和田三造らが出た。当初は文展に出品していたが、大正4年からは二科展に出品し、翌年会員となった。戦後は二紀会の創立に参加したが、昭和26年に退会し、その後は団体に属さず制作を楽しんだ。同42年に文化勲章受賞者に内定したが辞退し、栄位を望まない自由な生活は「画壇の仙人」とも称された。自然の形象を単純なフォルムとめりはりの利いた強い色調で描き、味わい深い独自の画風を確立した。</p>		